

# TEN

英語教師のための情報誌

Vol. 39  
SUMMER 2018

TEACHING ENGLISH NOW



特集

1年のはじめにこそ考えたい

## 年間指導のグランドデザイン

### 巻頭エッセイ

表紙裏 10年後の自分を考えて 最上 峰行

### 特集 1年のはじめにこそ考えたい 年間指導のグランドデザイン

01 Plan・Action・Reflectionで教師も生徒も成長したい 今井 裕之

04 年間指導計画と実践例 1年生 坂本 南美 / 2・3年生 谷口 友隆

### 連載

08 実践 NEW CROWN -わたしの授業紹介- 村上 正行

10 英語教師のための基礎講座 授業づくりを楽しむために(1) -「なぜ」を問う- 樫葉 みつ子

11 Essay Vocabulary Building Matthew Miller

11 リクツで納得! 学校英文法の「文法」 someとanyはどう違う? 亘理 陽一

12 明日の授業と評価をブラッシュアップするQ&A 根岸 雅史

13 TEN通信 教育Webコラムのお知らせ

SANSEIDO



# 10年後の自分を考えて

最上 峰行 Mogami Takayuki



©池上直哉

1974年福島県生まれ。宮城県仙台第一高等学校在学中にオーボエ奏者を志し中退。大検を取得し、桐朋学園大学音楽部演奏学科入学。「第69回日本音楽コンクール・オーボエ部門」第3位入賞。現在、東京交響楽団オーボエ&イングリッシュ・ホルン奏者、桐朋学園大学・東海大学非常勤講師。クインテット・アッシュ、エロイカ木管五重奏団、室内オーケストラARCUS、各メンバー。

絶対に、プロオーケストラのオーボエ奏者になる。  
その夢が、辛い時期の心の支えになりました。

中学校までは成績は常に上位。親や先生に叱られるようなことは絶対したくない、そんな子供でした。中学では吹奏楽部でチューバやオーボエを担当し、部長も経験。周囲の信頼も厚かったと思います。

高校は進学校の仙台一高へ進学したものの、周りは今まで何でもうまくいったような優等生ばかり。彼らに対し、どこか自分を見ているようで、周囲になじめず、学校をサボっては遊んでばかりいました。でも、オーボエだけは絶対にやめなかった。**CMで聴いた宮本文昭さんというオーボエ奏者の音色に心を奪われ、将来プロのオーボエ奏者になるという確固たる夢があったからです。**

高校は中退しましたが、プロになると決めていたので全然怖くありませんでした。アルバイトをしながら大検を受け、宮本先生が教えていらした桐朋学園大学に入学。残念ながら、その時宮本先生はドイツにいらっしゃり直接レッスンは受けられませんでした。が、<sup>かき</sup>嶋崎先生との大きな出会いがありました。僕は嶋崎先生の最初の生徒で、

本当にかわいがっていただきました。先生の言葉で印象的なのは、「10年後に自分がどんな演奏家になっているか考えて練習しなさい」というもの。目先の楽しいこと、楽なことだけをやっていたら成長出来ない。貴重なことを教えていただいたと思っています。

大学3年のときに日本音楽コンクールで一次通過。そのとき審査委員長だった宮本先生が「頑張ったね。君は嶋崎先生に習って本当に良かったね」と声をかけてくださったんです。その言葉を聞いたとき、夢に向かって着実に歩みを進めていると実感しました。大学は実技の授業しか出ていなかったので単位が足りず中退しましたが、一次を通過した時からプロのオーケストラにエキストラとして呼んでいただいていたので、夢に向かって不安はありませんでした。

26歳で日本音楽コンクール3位に入賞して、さらに飛躍できるかと思いきや、オーケストラにはなかなか入れず、34歳で東京交響楽団に入るまでの8年間は辛

い日々でした。今思えば人間的にもとても未熟だったんだと思います。それでも、オーボエはやめられなかった。**どんなに辛くても自分はプロとしてやっていけると信じていたし、オーボエをやめてしまったら、自分が本当に大好きな音楽に費やしてきた時間が無駄になると思ったからです。**

僕は今オーボエのセカンド吹き（二番奏者）で、首席奏者の演奏を支えるポジションです。他人を支える、他の人のために頑張るという気持ちは昔の優等生だった自分にはなかったかもしれません。だからこそアンテナを張り巡らせ、一音一音の役割を考えて吹いています。オーケストラの素晴らしいところは、それぞれが色々な人生を背負いながら一緒に一つの曲を奏でるところ。個人の事情は一切見せずに素晴らしい音楽をお客さんに届けたいという目標のために努力しているところが素敵だと思います。これからは、自分が教えている生徒たちにもこういったオーケストラの楽しさと厳しさの両方を教えて、将来の音楽家仲間を育てていきたいなと思っています。



東京交響楽団のリハーサル（ミュゼ川崎にて）



オーボエの神様 ハイッツ・ホリガー氏と（サントリーホールにて）



所属する木管五重奏団 クインテット・アッシュのCD

# 1年のはじめにこそ考えたい 年間指導のグランドデザイン

春、新入生を学校へ迎え、いよいよ新しい1年間の始まりです。

「年間を通じてどんなふうに生徒を指導し、1年後の春にはどんな姿で次の学年に送り出してあげようか」、  
年度の始まりの今だからこそ、深めて考えたいテーマです。

本特集では、年間指導計画の立て方や実践のポイント、振り返りと評価について今井裕之先生に解説いただき、  
坂本南美先生・谷口友隆先生にはご自身が実践されている各学年の年間指導計画をご紹介します。

- ① 総論：Plan・Action・Reflectionで教師も生徒も成長したい(今井 裕之)
- ② 年間指導計画と実践例：1年生(坂本 南美)／2・3年生(谷口 友隆)

## Plan・Action・Reflectionで 教師も生徒も成長したい

今井 裕之 (関西大学)



### なぜグランドデザインなのか

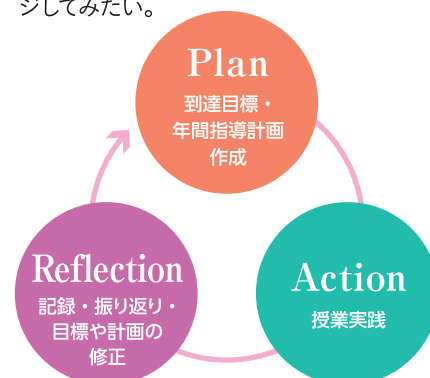
教育は、そして授業も、たいてい計画通りには進まない。予想外の出来事に翻弄されることもあれば、感動させられることもある。かといって計画なしに経験則で一年を乗り切ってしまうと、終えた充実感が残っても、成長の実感を得ることはない。

成長する教師とは、育てたい英語学習者の具体的なイメージを複数持ち、年間指導計画を立て、実践を記録・省察する反省的实践を重ねることで、教育者と

しての自分の変化や生徒たちの成長を同僚と語りあうことができる人である。

学校でもPDCAサイクルによる職場改善が推奨されるようになって久しい。PDCAは、改善につながる評価(Check, Action)が重要なポイントであるが、計画と実施(Plan, Do)の後にCheckをする時間がないまま次のPlanが迫って来てPDPDスパイラルに陥る危険性が高い。

そこで本稿ではPDCAの区切りではなく、「手軽な授業記録方法」を用いた、「計画(Plan)→実践(Action)→振り返り・評価(Reflection)」というシンプルな実践と評価のサイクルづくりを提案する。最初に到達目標の設定(3年間と各学年)を行い、その目標に従った「年間指導計画作成=Plan」「授業実践=Action」そして「記録・振り返り・目標や計画の修正=Reflection」を経て次年度につながるという行程をできるだけ具体的にイメージしてみたい。







# 自分の実践を語れるようにプランニングする

Plan

年間指導計画をデザインするというのは、私たち教師が自分の指導経験を他の教師や生徒たちと共有するため、CAN-DOリストのような「枠組み」に当てはめて語る（説明する）ことである。しかし、ほとんどの指導計画はどこかで修正を余儀なくされる。十人十色の生徒と教師がコミュニケーションするのがよい授業なのだから仕方がない。計画の完成度は6割程度で十分である。そのかわり、授業実践に時間とエネルギーを注ぎ、生徒の様子をしっかり観察し適切に対応できるようにしたい。計画通りにいかなくとも結果的に授業がうまく展開できれば、それを記録して振り返ることもさほど苦痛ではなくなるもので、そうすれば授業改善のサイクルが回りだす。

年間指導計画の具体事例については、p. 4からの坂本先生（1年生）と谷口先生（2, 3年生）の実践例をご覧ください。お二人の各学年の目標部分をおおまかにまとめると下の表のようになるかと思う。実際の授業では、学期ごとにこれ

らの目標を達成するためのステップとなる言語活動が設定され、さらにその言語活動を実施するために必要な下位技能をいつ、どのような学習活動で身につけるかが計画されている。このようにしっかりとした実践計画を立てるには、必要な知識・技能や言語活動を具体的にイメージできる到達目標を設定することが求められる。そのためには、CAN-DOリストを参照するとよいだろう。CAN-DOリストの構成要素の核となる「Topic/Text（話題・テキスト）」、「Task/Performance（タスク・パフォーマンス）」（=表の下線部分）と、活動のデザインや評価の際に参照できる「成長課題」（=表の赤字部分）が到達目標に盛り込まれていることが大切である。

では、坂本先生と谷口先生の年間指導計画を俯瞰し、中学3年間の成長を読み取ってみよう。まず、3年間共通の核となる目標として「自分の意見や考えを表現できる」ことが掲げられているのがわかる。さらに、各学年に合った成長課題が核と

なる目標に付帯している。1年生では「様々な表現を用いて」「他者を意識した」、2年生では「少し時間をかけ」「身近な事柄であれば」会話ができ、スピーチでは「論理的展開のある」話もできるように、3年生では「理由や根拠を挙げて即興で」「身近な事柄であれば自ら」会話を展開でき、他者に「感動を与えるような文章表現ができる」ことを目指す。これはCEFR-JのA2-2レベルにほぼ到達する目標であると言える。さらにこれを次期学習指導要領の目標に照らすと、「話すこと[やり取り][発表]」の目標「ウ」に掲げられた「社会的な話題」への対応を除けば、おおよそ全てを満たすレベルの実践であることがわかる。このように目標を立てることで、自身の実践と生徒の英語力を教科書の進度をはじめ、入試実績や外部試験の合格者数などに依存せずに広く共有することができる。まさに「共通参照枠 Common Framework of Reference」である。

## ■1・2・3年生の到達目標

	到達目標
1年生 (坂本先生)	基本的な言語材料を習得し、場面に応じた表現を取捨選択できる。 <u>様々な表現を用いて</u> 、 <u>意見や考えを伝えることができる</u> 。 <u>他者を意識したやりとり</u> ができる。
2年生 (谷口先生)	<u>自分の意見や考えを</u> 、 <u>少し時間をかければ表現</u> できる。 <u>身近な事柄であれば簡単なやり取り</u> ができる。 <u>選んだテーマについて論理的な展開による原稿</u> を書き、スピーチができる。
3年生 (谷口先生)	<u>自分の意見や考えを</u> 、 <u>理由や根拠を挙げて即興で表現</u> できる。 <u>身近な事柄であれば会話を自ら展開</u> できる。英語で <u>感動を与えるような文章表現</u> ができる。



# ActionとReflectionを結ぶ「記録」

Action

Reflection

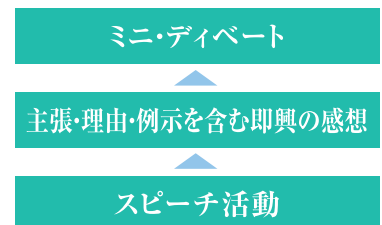
## ①「縦積みシラバス」で計画の柱をつくる

授業実践中には「計画は変更するものと考える」ことと「継続的に記録すること」を大切にしたい。

もちろん変更できない計画の骨格はある。目標とする言語活動と関連する技能の練習の組み合わせと配列などはその例であり、入れ替えできない「縦積みシラバス」である。1年1学期にShow and Tellをする計画を立てた坂本先生は、ゴール

に向かうための前段階となる活動として、朗読やスモールトークのリスニングを取り入れている。谷口先生の場合も、3年生で、スピーチ活動→即興で理由や例をあげて感想を言う活動→ALTとのミニ・ディベートへと言語活動をつなぎ、積み上げていく。高度な言語活動を実現するための縦のつながりを見ることができる。このような「縦積みシラバス」の計画がグランドデザイン

の骨格である。目標言語活動と下位技能の「縦積みシラバス」は原則的には変更しない。





## ②「横並びシラバス」から計画の見直しを

反対に柔軟に変更すべきなのは、いつどの順序でも指導が可能な「横並びシラバス」である。言語活動やその練習過程でエラーが生じた際に指導されることが多い発音・発声や文法などがこれにあたる。どんなエラーがいつ出てくるかわからないし、修正する・しないの判断も難しいので、何を契機や根拠に指導するかは、学習者の教室でのふるまいや英語のパフォーマンスから判断することになる。

右の表は、言語活動を「課題 (What you do with language)」と「評価 (How well you do it)」に分けて示したものである。表の上段にある「言語活動 課題=Topic/Content, Task」を、年間指導計画の「縦積みシラバス」とし

て設定し、授業では下段の「できばえ評価 観点=Accuracy, Fluency, Complexity」に基づいて生徒のパフォーマンスを評価し、発音や文法の出来具合から指導が必要な項目を「横並びシラバス」として決めていく。

例えば、「友達のスピーチに感想を言う言語活動」で、生徒たちが過去形と現在形をうまく使い分けて感想を言っていないことに気づいたとする。そこで生徒たちに感想を発表させる計画を変更し、教師が感想を板書して、どんなことを過去形で表現し、どんな場合に現在形で表現するのかに気づかせ、自分の感想を見直す学習に変更するかもしれない。発音指導であれば、練習機会が多い「発表」課題の時に、

語彙指導であれば、表現ができずにもどかしい思いをする「やりとり」の機会に、生徒のパフォーマンスのできばえを見ながら指導する。

このように、言語活動のできばえ評価に基づいて継続的に計画の修正を図ることで、より適切な活動を通して生徒たちの英語力を伸ばしていくことができる。

### ■言語活動と「縦積み・横並びシラバス」の関係

言語活動課題(「縦積みシラバス」)	
●Topic/Content	何の話題・内容について
●Task	何をするのか
できばえ評価観点(「横並びシラバス」)	
●Accuracy, Fluency, Complexity	発音・文法・語彙等から伝わりやすさを判断

## ③手軽に授業記録をつける方法

「実践を継続的に記録する」ことも大変だ。年間指導計画、授業指導案、評価計画を立てた上に、自分以外は読まない授業記録を作る気にはなれないのだが、記録なしには改善はない。私の場合、大学では、授業の展開や活動を示したプリント1枚と、教材を提示するスライド一覧を学生に配布しており、それを授業記録としても残している。学生が使うものなら作成する動機になるので継続は容易だ。ただし、予定と異なる授業展開になった場合、スライドとプリントを必ず授業中か授業後にPCで修正する。この修正資料が冒頭で述べた「手軽な授業記録方法」であり、次回の授業の新しい資料にもなる。作成した資料を眺めると「単語の練習が

足りないまま言語活動をしている」「言語活動後の振り返りの機会が多すぎる」など、指導内容の過不足や、授業展開の不自然さに気づく。中学校の先生がたの授業資料(プリント)の多くは、生徒にとってはワークシートになり、教師にとっては授業の流れが見通せるものになっているので、このような点に気づきやすい。これに帯活動用の表現や語彙のリストも一緒に並べてみると、なお一層指導内容の質と量を調整できるだろう。この程度の記録と振り返りであっても、複数年続けると過去の実践との比較もでき、自分の成長に気づくこともある。配布資料やICT機器を使わない場合でも、授業後の板書を写真に撮ってアルバムにまとめると、Actionと

Reflectionをつなぐための良い記録となる。

自分の実践記録に加えて生徒たちのパフォーマンス記録も残しておく。デジタルメディアで生徒たちの様子を記録することは大きな運用管理責任を伴うが、プリントなどにアナログで言語活動記録を残しても、参照する手間がかかる上にかさばる。評価の基準(ベンチマーク)になりそうな作品や、モデルになりそうなパフォーマンスを、写真、スキャン、録画、録音などの方法で記録しておく効果的だろう。そうすることで、普段から目標への到達度や頻度の高いエラーなどを意識しながら生徒のパフォーマンスを見ることにつながり、記録だけでなく、学習指導にも役立つ。

## おわりに

手軽な方法でよいので記録を続けることが、ActionとReflectionをつなぎ、生徒と自分の成長を実感するために必要である。指導計画を立てる時には、記録を見ながら「1) 到達目標の達成度、2) 単元ごとの指導成果、3) 指導不足の技能や領域」を評価(Reflection)して次の改善計画(Plan)へとつなげていきたい。年間指導計画を眠らせないためにも、記録をとって自分の授業を振り返り、教師も生徒も成長できる一年を目指そう。



著者紹介

今井 裕之

・関西大学外国語学部 教授  
・専門は、小中高の英語授業研究、スピーキング評価研究



# 年間指導計画と実践例

坂本南美先生・谷口友隆先生に、ご自身でも実践されている各学年の年間指導計画をご紹介します。

## 1年生



坂本 南美

・岡山理科大学教育学部 准教授  
・元兵庫県立大学附属中学校等教諭

### 1年生の指導にあたって

次の学習指導要領では、小学校5、6年生の外国語が教科化され、「話すこと」「聞くこと」に「読むこと」「書くこと」が加わり、この4月から先行実施に入る小学校も多くあります。中学生を教える教師は、小学校からの学びのバトンをどう引き継げばよいのでしょうか。「書くこと」では小学校で「書き写すこと」までを扱いますので、中学校では「自分の言葉で書く」活動を積極的に取り入れて、自然な形のライティング活動をくり返し指導したいところです。また、「話すこと」は、小学校での経験を活かしながら内容を膨らませ、分量を増やしていきましょう。このように、小学校からの学びのバトンをうまく引継ぎながら、読んだり、聞いたりすることも含めてauthenticなグランドデザインにしていきたいと思います。

### 年間指導計画



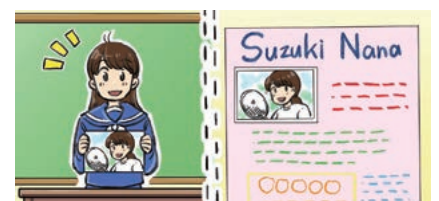
### 1学期 「自己紹介Show and Tell/ポスターの製作」に向けて

わたしが中学校の教師をしていた頃、1学期のゴールとして、様々な英語表現を織り交ぜた「聞き手に伝わるShow and Tell」と「視覚に残る新聞・ポスター製作」をセットで経験させていました。4月の自己紹介で、新入生の中には、小学校での経験を活かし、絵や写真を見せながら発表をした生徒がいるかと思います。この学びの経験とのびしろを活かして、中学校ならではのShow and Tellになるように1学期の学習をデザインします。具体的には、小学校では「表現」でしかなかったものを、自分の言いたいことにあわせて使いこなせるようになるまで文法として定着させることや、ペアワークを通じた語彙や英語表現のインプット、また、段階的に発展させる

発音クイズなど、学期末の発表に必要な要素を練習していきます。また、ALTや英語科教師 (JLT) のsmall talkによるリスニングや、リーディングの一環として行う朗読活動を通じて、手本となる英文を聞く・読む指導も大切です。その英語を参考にして、話す内容を取捨選択してまとめるスキル、相手に伝わるように話すスキルを身につけていきます。

そして、Show and Tellの発表が終わったら、その内容をポスターや新聞にまとめて掲示していきます。これは、視覚に残るものを作る、という活動を行うことで、書くことをぐんと意識させることが目的です。読者の理解を助ける絵や写真を添えながら、伝える内容をしっかりと英文にまと

めて、文字を用いて自分のことを読み手に伝えます。次期学習指導要領に照らし合わせても、これは、小学校での「書き写す」活動から、「自分の言葉で書く」という作業へのシフトとも言うことができるといえます。この活動に向かって、普通の授業では、間違えずに英文を作るという作業にとどめず、読み手を意識して場面設定をした書く活動を取り入れましょう。書いたものをはさんで生徒同士の新しい対話が生まれる可能性も十分に含んでいます。





## 2学期 「クイズ大会,クイズ新聞」に向けて

2学期のゴールとして、いろいろな英語表現を用いたクイズ大会を行い、セットとしてクイズ新聞づくりの活動はいかがでしょうか。He is ～./He has ～./It is ～./He can ～.など、12月までに習った英語表現を用いて、ある人物やもの、建物、場所、動物などを当て合うクイズ大会の開催です。生徒が一人ずつ教室の前に出て5文ほどのクイズを発表し、班ごとにポイントをためていくシステムにすると自然に生徒同士のやり取りが生まれます。たとえば、post officeが答えの場合、生徒は「It is in our city. It is near the station. You can buy stamps there. My father works there.」のように発表をしていきますが、そこには、答えの設定やヒント文を提示する順序など、その作成者の個性が出て、クラスの仲間をより深く知るよい機会になっていきます。さ

らに、「4文目あたりから答えを絞り込めるようなクイズを作ってみましょう」といった制限をかけていくと、自然に生徒たちが提示する文の順序をじっくり考えて取り組む活動になります。

また、発表の後には、ぜひクイズ新聞を作ってみましょう。伝える内容や順序を考えることは、生徒たちにとって、小学校での「書き写すこと」としての英語と区別して、「自分のことばで書くこと」へと活動の目的がシフトしていくことでしょう。

この活動へ向けて大切なことは、多様な英語表現をしっかりとストックさせていくことです。三人称単数の扱いや助動詞、現在進行形も学習し、さらにそれらの疑問文・否定文も学び、文法事項が多岐にわたる2学期だからこそ、言いたいことが適切な英語で言えるように、語彙や構文のインプットだけでなくペアワークやミ

ニヒントクイズを通じて自分のことばによるアウトプットも帯学習に取り入れていきましょう。その積み重ねが、いずれまとまった英文を話すこと、書くことへとつながります。また、どの順序で英文を提示していくのが効果的なのかという論理的な考え方にも少しずつ触れさせるために、海外の児童向けのクイズショーを動画で視聴したり、ALTやJLTによるクイズの時間を設けて、聞き取ったり読み取ったりしながら構想を考えるヒントを見つけることもできます。



## 3学期 「未来の自分への手紙」に向けて

3学期のゴールとして、1年後、つまり3年生になる自分への手紙を書くことを提案します。

“Dear, me. Hi! What are you doing? Do you still like ... ? I am practicing ... every day. Are you ... now?”のように、中学1年生の終わりには、be動詞や一般動詞、5W1Hによる疑問文だけでなく、現在進行形や助動詞の文など、自分のことを表現したり、他者とのやり取りを広げたり、何かを描写したりするときに使える言語材料が充実してきます。ちょうど1年後の自分は最上級生になるところで、部活動では下級生を引っ張って練習に励んでいるかもしれませんし、生徒会にチャレンジしたり、もしかしたら何かの壁にぶつかったりしているかもしれません。中学生生活最後の春をスタートさせる自分に宛てた手紙を書くことは、英語の学習という側面だけでなく、目標となる自分を描くいい機会になると考えてい

ます。教師をしていた頃、手紙を扱う際には自身で保管し、3年生の4月に生徒へ手渡していました。この手紙をクラスで発表するか、手紙のまま留めておくかは担当の先生方の裁量にお任せするとして、例えば、「1年後の自分像」というタイトルで口頭発表を行うなど、手紙の内容とは別の発表活動を設けるのも一つです。

この活動へ向けての準備として、自分の思いや考えをいろいろな英語で表現できる言語材料を定着させる活動も帯学習に取り入れていきましょう。ペアによる5W1Hを用いたやり取りや語彙の定着を図るゲームやビンゴ、文を入り混ぜたスクランブルゲームなど、英作文スキルの上達を意識したタスクを継続的に行うことは効果的です。また、「canを使った自分のできることリスト」や「昨日したこと」、「今、部活で取り組んでいること」など日常生活に関するお題について3行（3文）の英語を書くこと（3行ノート）で、自分

を表現する英文を書く機会を持つと同時に、手紙を書くアイデアのヒントにもつながります。実際に手紙を書く直前には、手紙の書式を確認する時間も設けましょう。この時期に始める3行ノートはA4サイズノートを3分の1にしたもので、お題や分量を変えながら個々の「ライティングの足跡」として卒業まで使いました。

教室に広げるauthenticなグランドデザイン。1年を通して、英語の力を育てながら、言語によるやり取りや仲間との作業の中で、生徒たちの心の成長も支えるものになることを願います。





# 2年生



谷口 友隆

・相模原市立大野南中学校 教諭

## 年間指導計画



### 1学期 「校外学習レポート」に向けて

2年生の1学期には、一般動詞の過去形の復習から始まり、be動詞の過去形、接続詞と未来表現を学びます。私の勤務校では、2年生の5月に校外学習を行うので、学期末には、ここでの見聞をレポートにまとめる、という活動を設定しています。そのステップとして、まず、過去のことを言えるように、春休みやゴールデンウィークのことなど過去の思い出を表現する練習をchatで毎回の授業で帯学習とし

て行いながら、感想を含めて、過去のことから表現する練習をしておきます。また、教科書 (NEW CROWN) の“Aloha!”は日記形式、“Peter Rabbit”は物語文で起承転結の構成、そして“The Ogasawara Islands”は紹介文のよいモデルになっていますので、USE Readを扱うときは、これらの文章を表面的に理解させるだけでなく、事実と感想のつなぎ方、時系列による紹介や、効果的な

紹介の工夫、段落のつながり、など文章構成にも焦点を当て、自分のレポートの参考にさせます。chatや日記を書く指導を通して、過去のことを表現することに慣れさせながら、必要な動詞を都度インプットしていきます。学期後半の段階で、マインドマッピングでアイデアを出す手法の指導や語順指導などを追加して、自分のレポートを少しずつ作成させていきます。

### 2学期 「スピーチ原稿の作成」に向けて

不定詞や接続詞を学び、自分で表現できることが顕著に広がりを見せる2学期、教科書に“My Dream”がありますので、これにならない、スピーチの原稿を作成するのが学期の目標です。“Uluru”や

“My Dream”のUSE Readで、段落構成や論理的な文章構成 (主張・理由・例示・結論) について指導します。また、マッピングからアウトラインを作成する方法、語順の指導を丁寧に行い、段階的

に自分の言いたいことを英作文する作業の中で、文法や語彙、また正確性に関わる部分も指導し、さらなる英語力の向上を図っていきます。

### 3学期 「スピーチ発表会」に向けて

2年生の学年末には、2学期に生徒がそれぞれ書いたスピーチ原稿の発表会を行います。そのために1学期から朗読練習とテストを行い、英語の音や音変化はもちろんのこと、ピッチ、イントネーション、リズム、スピード、強弱を考えた音読 (朗読) をさせ、感情豊かに自分のスピーチ

を発表できるよう、あらかじめ練習を行っておきます。また2学期にスピーチ原稿が完成した後は、効果的にスピーチ発表をするための音読を考えさせながら、冬休みに音読練習を課します。そして3学期に、グループや先生との個人練習・リハーサルを経て、スピーチ発表会を行います。

毎回の授業の最初の帯学習の時間で、数人ずつ発表させます。スピーチの最優秀者は、翌年度に行われる市主催のスピーチコンテストの学校代表者となるので、それを目指して生徒はがんばってくれます。

# 3年生



谷口 友隆

・相模原市立大野南中学校 教諭

## 年間指導計画



### 1学期 「修学旅行インタビュー」に向けて

3年生の1学期は「やり取り」の集大成の活動として、修学旅行で出会った初対面の外国人とカンペなしで、会話を楽しんでいくことが目標です。事前指導として、京都で出会った外国人にどのような質問をしたいかを考えさせると、「京都に来るのは何回目ですか」「抹茶を飲んだこ

とがありますか」「どのくらい京都にいますか」など、この時期に学習する現在完了形のよい練習になります。それらを考えた後、どんな風に会話が続いていくかを予想させて、ペアやグループで会話練習を行います。ここで教科書 (NEW CROWN) のUSE Speakの「会話を広げよう」や

Project「先生にインタビューをしよう」は有効に活用できます。ALTにも観光客役になってもらい、何度も会話練習を続けながら、会話を膨らませたり、自分のことを説明したりしながら、ある程度日常の会話ができるように指導して、修学旅行に備えさせます。

### 2学期 「スピーチ発表」に向けて

2学期は、2年生で行った校外学習レポートとスピーチの指導を活かして、今度は中学校生活の「発表」の集大成となる活動として、再びスピーチ原稿を作成させます。本校は「平和学習」が教育計画の軸となっており、生徒は、3年間を通して平和について学び、広島への修学旅行では、原爆ドームや平和記念資料館を訪れます。そこで、教科書の“The Story of Sadako”を鑑賞した後から、平和をテーマに据えて、修学旅行で学ん

だことやそれぞれの平和への思いをスピーチ形式で発表します。夏休み中にある程度の下書きを課しておき、英語に直す手助けを2学期の前半で行い、後半から一人一人に発表をさせます。そして、スピーチを聞いた後に、即興で一言感想を述べるができるよう、2年生で指導した、主張・理由・例示という流れで、3文(以上)で述べられるように指導し、例えば、“I like your speech because I understand that you were interested

in the statue of Sadako. So am I. I was surprised at many origami cranes.”などといった一言の感想を数人から述べさせます。さらにこの活動の発展として、ALTに反論するというミニ・ディベートを行います。ALTが主張したことに対して、I don't agree ...で会話をはじめ、理由や例を挙げて、自分の意見の合理性を即興でアピールする活動です。

### 3学期 「文集作成(エッセイ・詩)」に向けて

中学校の3年間、および英語の授業を通して、考えたことや感じたことをエッセイや詩で表現し、それをまとめて文集にするという活動を行います。卒業を目前に

控えたこの時期は、生徒が自分を見つめ直し、評価を気にせず思い思いに伝えたい内容を表現させてあげたいと思っています。また、教科書の“English for Me”

のように、英語を学ぶ理由をそれぞれに考えさせたく、英語が「ことば」であることを実感できる活動で3年間を締めくくりたいと考え、この活動を設定しています。



栃木県真岡市立大内中学校  
**村上 正行** 先生  
 (1・3年生担当)



本時の授業

BOOK1 Lesson 7  
 5時間目  
 (USE Read)



◆大切にしている言語観

私のもっとも大切にしている言語観は、自転車に乗ることに似ています。自転車に最初から上手に乗れる子はいませんし、転ぶのが怖いからと乗ることを避けていては、乗れるようになりません。英語も同様で、失敗を恐れず、挑戦する生徒に育てていくこと、たくさんの「わからない・できない」と出会い、「わかる・できる」に変わる瞬間を体験していくことが大切だと思います。授業では、言語を教わるというよりも、言語と出会い、体験し、考え、使い、失敗し、振り返り、自ら学ぶことを繰り返しながら言語を習得できるよう意識しています。その際、仲間とのコミュニケーションや学び合いを通して言語を実際に使用する機会を多く設けることを大切にしています。

## 授業紹介

授業  
開始

### Pre-reading

#### ① 帯活動「1分間トーク」(5分)

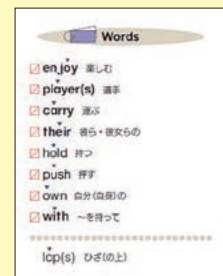
毎回、授業の最初に、会話のきっかけとなる質問を教師が提供し1分間のスモールトークをします。今回の授業ではWhat is your favorite sport?としました。場のモードを英語学習に切り替えること、単調になりがちな読解活動に熱を入れること、この後の授業展開への準備をすることなど、帯活動にはたくさんの目的がありますが、わたしの帯活動の主目的は英語を運用する力と、生徒同士の関係性を高めることです。

#### ② スポーツクイズ(10分)

さまざまなスポーツのルールをクイズ形式で答える活動を行います。Lesson 7 USE Read本文は障がい者スポーツ2種とその説明についてです。生徒がUSE Readを自力で読むための下地を整えるためにこの活動を行います。そのため、誰もが知っているスポーツについて、可能な限り本文の言語材料や言い回しにそってクイズを作成することが重要です。クイズを通して教師とインタラクション(意味のあるやりとり)をしていくうちに、生徒が本文を理解するための多くのヒントを自然に吸収することをねらっています。

#### ③ Wordsの導入(5分)

本文を読むために必要な新出語句を生徒と一緒に確認をします。確認はパワーポイントの視覚情報を併用してスピーディーに進めます。教師と生徒で読んだり、意味を考えたり、時には絵を描いたり、様々な角度から、強いイメージとともに新出語句に触れる体験を繰り返すことが大切です。地味で根気のいる活動ですが、いかに飽きさせずに練習させ、理解・定着させられるかが勝負となります。



Pre-reading

### While-reading (25分)

#### ④ スポーツの説明文(本文)を読み、理解し、相手に伝える活動

活動の概要

本活動では、読むことの必然性を「相手に説明するために、本文を読む・理解する」ことと位置づけています。クラスをA・Bの二つのグループに分けて、本文にある二つのスポーツの説明文のうち一つを読み、本文の内容を表す絵をペアで協力・相談しながら描きます。その後、別のグループの生徒に自分が描いた絵を活用し、読みとった内容をリテリングして伝える活動です。

リテリングをするためには、何度も読み返して内容を自分のものにする必要があり、その過程で自然に本文をより深く理解することができます。これが、伝える活動で本文暗唱ではなくリテリングをさせる理由です。理解した内容をイラストで書く目的は、読解活動をより楽しくさせ、またペアでの意見交換や学び合いを活発にさせるためです。

While-reading

## ◆本時のポイント

私が読解活動の授業をデザインする際に気をつけていることは次のとおりです。

1. その読解活動は読む必然性を生み出しているか（文法的な解釈に終始していないか）
  2. その読解活動は生徒がこれまでに学習したことを活用し、進められるようになっているか
  3. その読解活動は生徒の知性・協調性を高めているか
- 本文はスポーツの説明文ですから、その目的は対象となるスポーツを知らない人に説明するために書かれているということになります。そのため、本文にある2種類のスポーツの内容を読み取り、知りえた情報をもとに相手に説明する活動を中心として授業をデザインしました。

## Lesson7 指導計画

自己関連性の高い言語の使用を通して、「理解された言語」から「使用できる言語」にまで生徒の言語力を高める。

### GET (4時間)

新言語材料, canの使用場面, 形, 意味を理解し, 使用する。

### USE (3時間)

▶1・2時間目 USE Read

GETで理解され定着した知識を駆使して, 本文を理解し, その内容を相手に伝えられるようにする。ここでは, コミュニカティブな読解活動となるよう工夫をしている。(本時は1時間目)

▶3時間目 USE Speak

Lesson 1〜7で学んだ知識と実践を活かし, 対話活動をする。

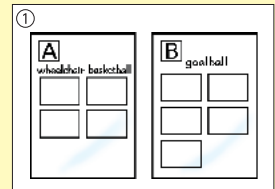
### 文法のまとめ(1時間)

自己表現活動「未来のわたしができること」(1時間)

## 活動の進め方

### Pictionary活動(15分)

①Group A・Bに分かれてWheelchair Basketball, Goalballについて読み、活動の最後にはA・B同士でペアになり、互いにリテリングすることを伝えます。Group Aには四つの窓が書かれたプリントを、Group Bには五つの窓が書かれたプリントを与えます。Group Aが四つ、Group Bが五つなのは、Use Readの本文の文の数です。生徒のレベルが高い場合は、この窓の数を減らすと難易度をあげられます。



②Group Aの人同士でペアになり、Wheelchair Basketballの内容を絵で描くために、互いに協力して本文を読み込みます。Group Bでも同様にGoalballの内容を絵で描きます。読解作業をペアですること、それぞれが足りない知識を補い、確認し合いながら、生徒たち自身の力で読解を進めることができます。彼らの描く絵が本文の内容と合致していれば、本文の内容を理解していることを教師が知ることができます。また、絵を描くことに集中しすぎないように、絵は簡単に描くことを確認しておくことも重要です。



### 次時のRetellingへ向けた活動(10分)

次の時間には、Group AとGroup Bの生徒同士で新たにペアになり、本時で作成した絵をもとに互いに説明し合うことを伝え、ここでは絵を描いたペアでどのように説明するのが効果的か話し合い、練習をさせます。最初に教師が（canを使って）モデルを示すことで、より効果的な活動ができると思います。私はサッカーの説明文と絵を用意し、リテリングのデモンストレーションをして見せました。



### ⑤振り返り(5分)

教科書本文が理解できたかを確認、なおかつ次時のリテリングのヒントとなるようなComprehension checkのワークシートに取り組みます。宿題として、リテリングの練習を与えます。ペアで作成した絵は教師が一度預かり、生徒が下校するまでに一部コピーしてペアの両方にいきわたるようにします。

本時の活動の続きは、次号で紹介します。

授業  
終了

## ■ 授業を終えて

Pre-readingで行ったスポーツクイズやwordsの導入を通じて本文読解に必要な言語材料に対する理解が深まっていたことで、While-readingでの活動がスムーズに進んだと感じました。説明文の内容を相手に伝えるというゴール設定をすることで読む意味が生まれ、生徒たちはより熱心に読解活動に励んでいま

た。その活動の中で、ペア同士で何度も本文を指さし、話し合い、どんな絵を描くと良いかを一生懸命に話し合っていたことが印象的でした。Pictionary活動は、生徒たちの理解レベルを把握しやすく、アドバイスもしやすかったです。本時のポイントに示した内容が達成できるように授業デザインを工夫しました。



# 授業づくりを楽しむために(1)

— 「なぜ」を問う —

榎葉 みつ子 Kashiba Mitsuko (広島大学)

## ① はじめに

頼れるベテラン勢が少なくなった現場で、小学校の英語が教科化されることをはじめとして、これまでと大きく異なる英語教育が展開されようとしています。

そんな未来を担う先生に期待されるのが、よりよい授業のための自律的な取り組みです。本講座では、授業の計画や振り返りを充実させるためのポイントを3回にわたって紹介してまいります。

「なぜ」を問うことを、最初に取り上げました。創意ある実践に不可欠なのは、目的や理由を持つこと、それらを言語化することだからです。授業を構成する要素である「活動」に焦点を当てて考えてみましょう。

## ② 「ルーティーン」を見直す

英語の授業は、一連の「活動」で構成され、すべての活動は目的をもって行われます。しかし、ルーティーンのように、同じ活動がただ繰り返される場面も、実際にはよく見かけます。

例えば、授業の開始時、挨拶の後に、曜日・日付・天気に関する先生と生徒とのやり取りが続くことがよくあります。毎回このやり取りを繰り返すとすれば、3年間では何時間かを費やすことになるのですが、その目的とは何なのでしょう。こ

れに対して、ある先生は、1年生の当初は、間違いやすい基本語彙の習熟を意識して行うと答えました。その目的があるため、口頭でのやり取りの後、“How do you spell Thursday?”と尋ね、生徒には、綴りを言いながら指で宙に書くようにさせていました。疑問文を定着させるために、ペアでこのやり取りをさせている先生もいます。目的を持つ先生方には、ルーティーンは意味のある繰り返しとなっています。

今後、小学校で月名や曜日を学習してきた生徒に、同様のやり取りが必要か、必要ならば何のために、どう行っても考えなくてはなりません。さらに、音読練習、ペアワークなどの重要な活動でさえ、ただ何となく繰り返されていることもあります。よくある活動にこそ、目的を問いかける価値があります。

## ③ 選択の理由を見つける

変化を求めて、目新しい活動や方法を試すことも必要です。しかし、目先を変えさえすればうまくいくというものでもありません。生徒が混乱したり、活動よりも、活動の説明に時間を要する事態が生じたりもします。教員生活1年目のある教員は、当初は、面白そうだった実践書のアイデアに次々と飛びついていたようです。しかし、それでは目的のある指導

とは言えないことに気づき、そこから徐々に、目的を意識して選ぶようにしたら、授業が少しずつうまくいっている気がすると言います。具体例を参考にすると、自分なりの理由をもって選択することが目的に沿った使い方の工夫をもたらす、筋道立った実践につながる例だと言えるでしょう。

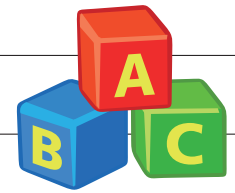
## ④ 授業の目標を明言できるまで問いつける

授業づくりの最も重要な問いは、目標です。野口(2008)は、「要するにこの授業の目的地はどこなのか。これを簡潔明快に、ひとことと言えるのが教師の条件でしょう。しかし、そう気がつくまでには、私もずいぶん時間がかかりました。」と述べています。授業の名人は、目標を明確に語れる境地に達するまで、自分自身に多くの問いかけを行ったことが推察されます。

英語の授業では、活動なくして目標の実現はありません。活動を見る目を鍛えることは、授業の目標を問い、目的地を明言できる力につながります。少し遠回りのように感じるかもしれませんが、「なぜ」と問い、その答えをもって授業を立案しましょう。それが手応えのある実践へとつながるのです。

【参考文献】

野口芳宏(2008)、『野口流 授業の作法』学陽書房。



Matthew Miller (Tokyo Woman's Christian University)

British linguist, D. A. Wilkins, said, “while without grammar very little can be conveyed, without vocabulary nothing can be conveyed” (Wilkins, 1972, pp.111-112). Despite vocabulary's importance, few practice effective methods to retain words in foreign languages. Memorizing lists of definitions is sufficient to pass a quiz the following day, but completely inadequate for practical usage and long-term memory. When students memorize new vocabulary words, they may be unable to use them correctly and will certainly forget most within a week. Without repeated and varied exposure, vocabulary cannot be deeply learned. So, what should a teacher do?

First, quit using word/definition lists and instead, introduce new vocabulary in context through readings. Then encourage the students to look up and record unfamiliar words themselves while they talk with their peers. Research and group discussion are proven to be more effective for long-term memory than memorizing. Re-introduce the words through listenings, more readings, and simple exercises. Students will discover how the vocabulary is used in different contexts and this repeated exposure naturally facilitates deep learning.

The next step is for students to produce language with these words. Start with short writing exercises and provide feedback about mistakes in use, register, and nuance. From there, have the students write and perform dialogues in pairs so they become accustomed to speaking and hearing the vocabulary. To do this, prepare a list of about twenty targeted words that are similar in theme. Set a topic, and allow twenty minutes for each pair to write 5-7 lines of conversation using at least five of the words. After two minutes of practice, the pairs stand in front of the class and perform their dialogues. The teacher should record vocabulary-related errors, write them on the board, then make the class discuss and correct the mistakes themselves.

Be aware that students have not necessarily deeply learned the targeted vocabulary just because they are passing quizzes or correctly using them in classroom conversations. These words need to be included in future texts, listenings, exercises, and evaluations throughout the course so that their memory is refreshed, and the instructor may check retention.

D. A. Wilkins. (1972). *Linguistics in Language Teaching*. London: Hodder & Stoughton Educational.



## リクツで納得! 学校英文法の「文法」 巨理 陽一 (静岡大学)

### someとanyはどう違う?



学生の頃、文法解説書の「someはふつう肯定の平叙文で使い、疑問文・否定文ではanyが代わりに使われる」という説明に納得が行かず、文法指導にこだわる一つの契機となった。例えば“Do you see any birds?”(NEW CROWN Book 1, p. 52)のanyをsomeで置き換えると英語として誤りなのか、誤りでないとすれば「ふつう」じゃないのはどういう場合なのか...私のようなリクツっぽい者が思うような、学習者のそういう分かりたい気持ちに込める探求をこの連載で行いたい。

現行版NEW CROWNでも、anyとその仲間 (anything など)、some とその仲間 (something など) はそれぞれ10回以上と少なくない回数登場する。冒頭の規則に照らすと、久美のスピーチの“For me, these words are stronger than any others.” (Book 3, p. 8)やアリスが発した“Does a name mean something?” (Book 1, p. 127)は「例外」ということだろうか。前後の発言・文章を踏まえ、改めてその意味を確認してみよう。

久美のスピーチは、「ビート・グレイの言葉が他のどんな言葉よりも力になっている」とい

うことだ。anyには根底に「どれを選んでも」という意味がある(毛利可信『英語再アタック「常識のウソ」』駈々堂、1987年)。「どれを選んでも」全て」という意味が前に出る場合は「なんでも・どれでも」といった解釈になる。久美のスピーチにはこれが当てはまる。一方、「仮に何かあるとすれば(どれを選んでも)」という意味が前に出る場合は「なにか・どれか」といった解釈になる。

自分の名前の意味を聞かれ、アリスは「名前って意味があるものなの?」と訊き返す。ここでは、ハンプティ・ダンプティの“Alice? What does it mean?”という質問に彼女が「名前には意味があるもの」という前提を読み取っており、somethingはそのことを表している。つまりsomeは、(特に強形で発音された場合)その存在を前提に「ある(特定のなにか・いくらか)」といった意味を伝えるのだ。前述の英文で、仮に久美が“some others”と言っていたら、特定の言葉を前提として“A winner never quits.”と比べていることになる。このスピーチに他の「名言」は出てきておらず、聞き手は奇異に感じるかもしれない。

そうすると、野鳥観察をしていて、鳥の存在を前提に“Do you see some birds?”と訊いても問題ないのではないか。実際ここは入れ替えても成立するケースだ。ただ水辺でいつも鳥に出会えるとは限らない。また、健はまだ双眼鏡を覗く前で、見えるかどうかエマに確認しようとしているこの状況では、いない可能性も認めた上で「(仮にいとすれば何かの)鳥は見える?」と尋ねる方が訊き方として押しつけがましくない。実際の会話でも、飛行機の機内サービスや招かれた食事の席で“Would you like something to drink?”と訊かれることがある。勤める側としては何かを飲むことを前提に訊く方が自然で、相手も返事がしやすいからだ。ただし、砂糖や牛乳は全員好むとは限らないので“Do you want any sugar/milk?”と続くだろう。冒頭の定義は「何かの存在を前提とするsomeは肯定文と、前提としないanyは疑問文や否定文と相性が良いことが多い」ということだったのだ。具体例と共にそう教えてくれていたら...私がこの原稿を書くことはなく、何か別の道に進んでいたかもしれない。



## Question

新しい学習指導要領の解説にある「受容語彙」「発信語彙」とは  
どういう意味ですか？ また、それらは、授業やテスト、評価では、どの  
ように扱えばよいですか？



## Answer

学習語彙は、まず「受容語彙」として提示され、その一部が「発信  
語彙」として習得され、最終的に使える語彙に変容します。それぞ  
れの段階を踏まえて、区別して指導・評価するとよいでしょう。



根岸 雅史(東京外国語大学)

「新学習指導要領」では、小学校の「外国語活動」が中学年(3・4年)に移行し、高学年(5・6年)で教科としての「外国語」が始まることになりました。この「外国語」では、単語は600～700語指導し、中学校の「外国語」では、1,600～1,800語程度の語を指導することになりました。つまり、中学校卒業までに、2,200～2,500語程度の語を学習することになったのです。「現行学習指導要領」では、中学校卒業時まで1,200語程度の語を学習するだけだったので、それが倍増することになります。

確かに、中学校だけを考えれば、1,200語程度の語が1,600～1,800語程度の語になるということで、1.5倍程度とみることもできるでしょう。しかし、授業時間数は変わらないのですから、それでも大幅増とみることもできます。さらに事態が複雑なのは、小学校で学んだことになる600～700語というのが、これまでの中学校の「外国語」のような学び方ではないからです。小学校の「外国語」では、すべての単語が「聞けて話せて、読めて書ける」という状態ではありません。しかも、小学校で学ぶ基礎語彙の中にまだらな習得状況が生じます。つまり、多くの基礎語彙は、「言えたり、聞いて

理解したりできます」が、「読んだり書いたりできない」ということです。

さて、「新学習指導要領の解説」には、「発信語彙」「受容語彙」という用語を用いて「生徒の発達段階に応じて、聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき語彙(受容語彙)と、話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙(発信語彙)」とがある」という説明があります。さらに、続けて、「上記の語彙数は、主として受容語彙として教材等を提示する際の範囲を示しており、学習を繰り返す何回もこれらの語彙に触れるうちに徐々に定着が深まり、受容から発信への転換が促進されるように指導していく必要がある。」とあります。つまり、教科書に出てきた単語のすべてを最初から発信できなくてもよいということなのです。

たとえば、曜日のWednesdayなどは、早い段階で導入される単語の1つかもしれません。これまでは、導入と同時に「書くこと」まで求め、綴りを書かせるような問題を出題していたかもしれません。しかし、上述の考えに従えば、Wednesdayのような単語は、中1で導入しても、はじめのうちは聞いてわかればよく、正確に書けるようになることを求めるのは、中3

ということも考えられます。英語嫌いが中学校の早い段階で生じ、その主な理由の1つが英語の単語の綴りを覚えられないことであることを考えると、こうした段階的な指導と評価のあり方は、今後さらに重要になるでしょう。

さらに、どういった単語が「発信語彙」となるべきかというのは、生徒によって異なります。たとえば、ある生徒が「関心のある事柄」について話すのに必要な語彙は、別の生徒には当面は理解できるだけでよいでしょう。スポーツ名などは、まず受容語彙として導入され、そのうち、学習者の興味のあるスポーツ名に限り、「発信語彙」となればよいと考えることができます。学習語彙は、導入時にまず「受容語彙」として提示され、その一部が段階を経て「発信語彙」として習得され、最終的には使おうと思えば使える語彙に変容していきます。

いわゆる基礎語彙は、いずれも「発信語彙」となる必要があるでしょう。しかし、それ以外の学習語彙は、「受容語彙」であっても、そのすべてが「発信語彙」となる必要はないと考えられます。

今後指導する単語が増えれば増えるほど、「受容語彙」と「発信語彙」の区別が指導や評価において重要になります。

## 教育Webコラムのお知らせ

三省堂教科書・教材サイトでは、小学校・中学校・高等学校の先生方へ向けた英語・国語のwebコラムを掲載しています。  
最新の教育情報や学校の「今」、これからの教育が目指す方向性など、多彩なテーマを取り上げていますので、ぜひ一度ご覧ください。

### 中学校・英語のコラム紹介



大島希巳江先生の連載コラム。  
英語落語を通じて見えた  
グローバル英語のあり方を探ります。

#### これまで扱ったテーマ

- No.1 グローバル化=欧米化ではない：グローバル化の危険性
- No.2 話し方は自分らしさを表現するアイデンティティの表出
- No.3 自分のアイデンティティを失わない英語を使おう
- No.4 グローバル化、ローカル化、そしてグローカル化!
- No.5 グローバル英語の概念：英語には何種類もある
- No.6 多種多様かつ共通点が多いアジアの英語
- No.7 変化した英語圏の英語
- No.8 日本的コンセプトの英語



英語教育界ホープの工藤洋路先生・津久井貴之先生が、コーヒー片手に「ゆるっと対談」しています。  
トレンドキーワードへの見解を、理論から実践まで幅広く語ります。

#### これまで扱ったテーマ

- Prologue：新学習指導要領が告示!この先の英語教育はどうなる?
- 第1回：とにかく書かせる!ライティング。
  - 第2回：言語活動の最大の壁「場面設定」は、絶対必要?
  - 第3回：「話す」「書く」向上のカギは、中1にあり!?
  - 第4回：驚くほど簡単な、教師の英語力UP術
  - 第5回：生徒の「即興力」、でもその前に。
  - 第6回：話し手の「即興力」、でもその前に。
  - 第7回：音読指導1「何のために?」「何を?」
  - 第8回：音読指導2「何回?」「何を?」「どうやって?」(4月2日公開予定)

アクセスは  
こちらから



三省堂 コラム 検索

<https://tb.sanseido-publ.co.jp/column/>



#### 編集後記

いよいよ小学校外国語教科化の移行期間が開始です。どんな授業で何をしているのか…いまから教室にお邪魔して見学するのがとても楽しみです。(TEN担当)